

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月21日現在

機関番号：	32501
研究種目：	挑戦的萌芽研究
研究期間：	2011～2012
課題番号：	23653174
研究課題名（和文）	社会的相互作用の中に立ち現われる心理学的な過去と未来の研究
研究課題名（英文）	A study of psychological past and future manifesting themselves in social interactions
研究代表者	
	大橋 靖史 (OHASHI YASUSHI)
	淑徳大学・社会学部・教授
	研究者番号：70233244

研究成果の概要（和文）：

従来内的心理現象と捉えられてきた時間的展望現象を、社会的相互作用と捉え直し、その生成プロセスを明らかにするため、未来や過去について語り合う占いの場を分析した。予備研究の後、占い師3名が30名のクライアントに対し占いを行う様子を録音・録画し、ディスコース分析等の手法を用い分析した。その結果、占い師とクライアントは、前者が専門性や権威を後者に示し、後者が前者に委ねる関係にあること、また語られた内容をクライアントの手相に帰属させる語りの定式化が存在すること等が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

Social interactions between fortune-tellers and clients were analyzed for revealing dynamic process of producing psychological past and future. After preliminary study, scenes in which fortune-tellers told their clients' fortune were recorded with IC recorders and video cameras. The audio and visual data were analyzed with techniques of discourse analysis and conversation analysis. The analysis revealed that the fortune-tellers indicated their specialized nature, authenticity and authority to their clients who entrusted their hands to the fortune-tellers and that the fortune-tellers attributed contents of told stories to their clients' hands in the end.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：時間的展望、社会的相互作用、ディスコース分析、ディスコース心理学、占い

1. 研究開始当初の背景

これまでの時間的展望研究では、主に質問紙調査や面接を用い個人の過去や未来について研究が進められてきた(都筑・白井, 2007)。そこでは、時間的展望現象は個体内部の心理現象として捉えられてきた。

これに対し大橋(2004)は、従来の時間的展望研究で扱ってきた現象を、他者との相互作用の中で過去や未来がダイナミックに生成していくプロセスとして捉え直し、そこに発

達的・通時的な過去や未来のあり方やその不変項を見出す可能性について言及した。その後、過去や未来が相互作用の中で生成されていく場を探し求めてきたが、占い師とクライアントの間でクライアントの人生について語られる占いの場はまさに、過去や未来が相互作用の中から立ち現れてくる場として適当であると思に至った。

これまで、占いという行為は心理学においてはあやしい現象もしくは非科学的な現象

として扱われることが多く、占いを信じる心理や騙されないための方法について研究がなされてきた。しかしながら、心理学以外の分野では、占いについての記号論(Aphhek & Tobin, 1990)や社会学、人類学、宗教学等においても研究がなされてきており、心理学においても新たな研究の広がり期待できる分野である。

<文献>

Aphhek, E. & Tobin, Y. (1990). *The semiotics of fortune-telling*. John Benjamins: Amsterdam.

大橋靖史 (2004). 行為としての時間 — 生成の心理学へ— 新曜社

都筑学・白井利明 (編) (2007). 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来人間の内的な心理現象として捉えられることが多かった時間的展望現象を、対人コミュニケーションにおける相互作用行為として捉え直し、その動的プロセスを明らかにすることにある。本研究では、未来—現在—過去について語り合う社会的相互作用の場として、実際の占いの場を研究対象とする。占いの場においては、占い師とクライアントの間にクライアントの人生すなわち時間的展望が生成されていく。こうした占い師とクライアントの間でかわされる言語的・非言語的なやり取りをディスコース心理学において使われる談話分析や会話分析の手法を用い分析することで、時間的展望の生成プロセスを明らかにすることが可能となる。特に、過去や未来が構築される際に用いられる語りの定式化の特徴や会話の進展に伴うコミュニケーションのトラブル管理などについて明らかにする。

3. 研究の方法

2011年度はメインとなるデータを取るにあたっての準備作業を、2012年度はメイン・データを取り、その分析を実施した。

(1)2011年度はまず、公刊されている占いに関わる雑誌や本、インターネットやロコミなど様々な経路を通して、占いに関わる資料を収集し整理した。それらの資料を整理することにより、時間的展望研究に関わる過去—現在—未来が占いにおいてどのように扱われてきたかを明らかにした。更に、資料をもとに、占いの種類、地域、評判などの情報を含む占い師のリストを作成した。

そして、作成した占い師のリストをもとに、複数の占い師に研究協力の依頼を行った。研究代表者は、研究への協力を承諾した占い師の元に赴き研究代表者自身の手相を占って

もらい、そのやり取りを IC レコーダーに録音した (四柱推命などを組み合わせて占われるケースもあった)。録音された 7 ケースの記録については、詳細なプロトコルを作成し、そのプロトコルに対しディスコース分析や会話分析の手法を用いた分析を行った。また、データや分析結果を関連する研究会において発表し、他の研究者から分析に関する意見やアドバイスを得た。

(2)2012年度は、2011年度の探索的なデータ収集及び分析をもとに、更なるデータ収集を行った。具体的には手相占いに関する数冊の著作があり、また手相占いの教室を運営する占い師の紹介のもと、3名のベテラン占い師を研究代表者が所属する大学に招き、3名の占い師各々が10名のクライアントに対し手相占い等を行った。合計30名のクライアントは、学生からボランティアを募り、占いの様子は IC レコーダーにより録音するとともに、ビデオレコーダーにより録画も行った。クライアント1名に対する占いに要した時間は30分程度であった。

収集された録音データは、プロトコルに書き起こされ、また録画データについては特徴的な動作がプロトコルに併記された。作成されたプロトコルデータは、主にディスコース分析や会話分析の手法を用い分析された。具体的には、シーケンス分析により会話の組織化や定式化の特徴が明らかにされた。またカテゴリー化がどのようになされているかが明らかにされた。本研究では、過去—現在—未来がどのように組織化されているかが考察のポイントとなったことから、未来に関する内容から過去に関する内容への移行といった、時間の様相が移行する際の組織化や定式化に特に注目した。また、組織化や定式化が明らかになった際は、それらの規則から逸脱した箇所の有無をチェックし、もし例外となる箇所やトラブルが生じている箇所が存在した場合は、そうした箇所に見られる特徴を包含するより包括的な定式化を見出すことを試みた。更に、偶然性や運命に関する語りやどのような形で現われているか、またそうした発話の前後で発話に変化が見られるか否かといった点についても分析した。

これら音声データに基づくプロトコル分析に加え、手相占いにおけるクライアントの手のひらの扱いといった、運命の媒介物となる手のひらが果たす役割についても分析した。分析にあたっては、占い師やクライアントが媒介物をどのように扱うか、また、占い師が用いる指示棒や虫眼鏡の使い方、占い師とクライアントの姿勢等にも注目した。特に、占いという場面において、手のひらという媒介物が果たす働きに焦点をあてた分析を行った。

ディスコース分析や会話分析は研究代表者が単独で行った場合、データの見方が固定化し、プロトコルの大切な特徴を見落としたり、柔軟で多様な見方ができなくなる虞があった。そこで、占いとといった現象に関心をもつ他のディスコース心理学者や、占いについて実証的な研究を行っている社会学者や人類学者といった他の研究領域の研究者らとの間で、得られた分析結果について討議を重ねていった。こうした討議により、分析によって得られた知見の妥当性を検証することが可能になるとともに、新たな分析の視点を含め有益なアドバイスを得ることで、分析をより深く豊かなものにするのが可能となった。

4. 研究成果

手相占いにおける占い師とクライアントの言語的・非言語的なやり取りのディスコース分析および会話分析から以下のことが明らかとなった。

(1) 占いの場における占い師とクライアントの関係は、医療の場における医師と患者の関係と同様、占い師がその専門性や権威をクライアントに対し言語的・非言語的に呈示し、一方、クライアントは占い師に自らの手のひらを委ねる関係にあった。例えば、手のひらを見る際に、占い師は、指示棒や虫眼鏡といったアイテムを利用していたが、それは医師が用いる聴診器やその他の医療機器と同様に社会文化的役割を果たしていた。また、占ってもらう際にクライアントは両手をテーブルの上に差し出し、一方、占い師はやや前かがみになり、両手が差し出された空間を物理的に支配していた。これによりクライアントは両手のひらを占い師に委ねる受動的な姿勢をとることになった。更に、占いが行われている最中にクライアントが片手を引っ込めようとした場面では、占い師が持っていた指示棒を引っ込めようとした手のひらの上に素早く動かし、その結果、クライアントは両手のひらをテーブルの上に差し出す姿勢に戻るといった一連の動作が観察された。

(2) 一つのトピックに関する占い師とクライアントのやり取りにおいては、最後に占い師が「その内容は手のひらに現れている」といったように、語られた内容を最終的に手相に帰属させる語りの定式化が見られた。例えば、将来の仕事についてクライアントが占い師に相談する一連のやり取りがなされた後に、占い師はそれまでの内容をまとめながらクライアントの手のひらを指示棒で指示し「この線がまさにそのことを示している」と、クライアント自身が語ったことも含め、手のひらの線にその根拠を帰属させる語りを行っ

ていた。こうした語りは交霊会における語りにもしばしば見られるものであり(Wooffitt, 2006)、そこでは霊媒師や客が語った情報を最終的に霊媒師が霊媒師しか接触することのできない霊へと帰属させていた。こうしたやり取りは、本研究において、手のひらへのアクセス権がクライアントではなく、占い師のみにあることと現象的に類似していた。

(3) 占い師はクライアントの過去や将来について当初は漠然とした内容を述べるが多く、クライアントがその内容を肯定すると、次第に語る内容を特定化していく傾向が見られた。例えば次のようなやり取りがそれにあたる。

占い師：パッと見て分かったのはねえ、これはもう非常に際立っているとこっちから出てるんですよ、この運命線を見れば、あの仕事運とか、3つの、4つに分けたらね

クライアント：ええ

占い師：出発点で親子の関係が分かるん、家系の流れ、お客さんはねえ、親子の縁が非常に薄いひと

クライアント：あえええ

占い師：それはまあたとえば、故郷を出たひとか

クライアント：ええ

占い師：あるいはその親が片親とか

クライアント：ええ

ここでは占い師が「親子の縁が非常に薄いひと」と言い、その陳述に対しクライアントが「あえええ」と否定しない応答をしたところ、占い師は「たとえば、故郷を出た人とか」「親が片親とか」とその陳述内容を特定化し、内容をグレードアップしていることが見て取れる。このように、当初は漠然としたあるいは一般的な内容の陳述がクライアントに否定されないと次第にグレードアップしていく現象は、前述した交霊会における霊媒師と客とのやり取りにもしばしば見られるものであり(Wooffitt, 2006)、これもまた類似した定式化とみなすことができる。

(4) 占い師はクライアントの将来について言及する際に、未来形の時制ではなく、現在形を用いた語り方をすることがあり、その際に現在形を用いて確定的に語った後に、「本当かどうかわかりませんがね」といった不確定性を示唆する陳述を付加する語りが見られた。これは、将来の出来事について通常言及する際に、「…だろう」と不確定性を孕んだ時制を用いたり、「…しようと思う」「…するつもりだ」といったように意志や希望を孕んだ陳述を行ったりすることと対照をなしている。占い師によるクライアントの将来

に関する陳述は断定的な場合が多く、それが占い師がクライアントの将来を占うという占いの場を成り立たせている。しかしながら、こうした現在形を用いた断定的な言説にはしばしば、「本当かどうかわかりませんがね」といった不確定さを示す陳述がやや小声の早口で付け加えられることがあった。これは、本来不確実な将来を確定的に語りながら、且つ、占いがはずれるといった将来の反証可能性を予め排除する定式化と見なすことができる。

(5)以上の結果から、手相占いという場において、クライアントの過去や未来が占い師とクライアントのやり取りの中でどのように立ち現れるか、その特徴が明らかになってきた。こうした特徴は、占いという場面におけるクライアントの過去や未来は、クライアント自身の内的な心理現象にとどまるものではなく、むしろ、占い師とクライアントの協同的な活動の中から生み出されていく現象であることを示している。

(6)本研究から得られた知見は、時間的展望現象に関わるとされる認知・欲求・動機・感情といった、従来人間の内的心理現象として捉えられてきた諸現象を社会的な相互作用行為として捉え直すことができる、もしくは捉え直す必要があることを示唆している。また、占いという場における占い師とクライアントのやり取りの軌跡を分析することを通し、過去や未来が生成されて行く様子を研究者が直接的に観察可能な現象として捉えることが可能となった。こうした研究方法をとることにより、未来や運命の偶然性や即興性といった、従来の時間的展望研究では扱うことが困難であった現象を実証的に研究する道が開かれていくことになる。

(7)また、心理学ではこれまで懐疑的な立場から論じられることが多かった占いという現象を、占われる事柄の真偽については一旦判断を棚上げにし、中立的な立場をとることにより、占うという行為に対し予断を持たずに接近することが可能となった。こうした研究は、イギリスのディスコース心理学者である Robin Wooffitt らが超常体験報告や交霊会におけるやり取りの分析を通し行ってきたものではあるが、これまでは過去の出来事の想起に重点が置かれ、手相占いといった未来に向かう行為を占い師とクライアントの協同的な相互行為として捉え、そこに見られる語りの定式化を明らかにしようとした試みは世界的にも珍しく、その点においても価値ある研究成果が得られたと言える。

<文献>

Wooffitt, R. (2006). *The language of mediums and psychics: The social organization of everyday miracles*. Ashgate: Hampshire, UK.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Wooffitt, R., Jackson, C., Reed, D., Ohashi, Y. & Hughes, I. (2013). Self-identity, authenticity and the Other: The spirits and audience management in stage mediumship. *Language & Communication*, 33, 93-105 (査読あり)

② Ohashi, Y., Wooffitt, R., Jackson, C. & Nixon, Y. (2013). Discourse, culture, and extraordinary experiences: Observations from a comparative, qualitative analysis of Japanese and UK English accounts of paranormal phenomena. *Western Journal of Communication*, 77(4), 466-488 (査読あり)

[学会発表] (計3件)

① 大橋靖史 (2011). 関係の中における個のふるまい 日本質的心理学会第8回大会シンポジウム『個性』の質的研究 ―個をとらえる、個をくらべる、個とかかわる― 話題提供 (11月27日、安田女子大学)

② Ohashi, Y. (2012). A study of psychological past and future manifesting themselves in social interactions. 1st International Conference on Time Perspective (9月7日、Coimbra, Portugal)

③ 大橋靖史 (2013). 国際時間的展望学会(1st International Conference on Time Perspective)の特徴 日本発達心理学会第24回大会ラウンドテーブル「世界の時間的展望研究の動向―国際時間的展望学会(2012 in ポルトガル)をもとに語り合おう―」話題提供 (3月17日、明治学院大学)

6. 研究組織

(1)研究代表者

大橋 靖史 (OHASHI YASUSHI)

淑徳大学・社会学部・教授

研究者番号：70233244